

## 圏外のアンテナ

### [鼻白粉]の巻

年下の友人Mちゃんは、コスメ番長である。最新のメーキャップ・テクニックで、すっぴんにはか見えない完璧なナチュラルメイクを日々仕上げている。

彼女に言わせると、わたしのメイクには、光と影が足りないそうだ。「鼻筋にはハイライトを、くぼんだ部分にはシャドウを入れる。そしたらもっと立体感が出るのに」と、いつも残念そうに唇をかむ。

さて先日のこと。須賀川の実家に帰って古いアルバムをめくっていると、青い法被（はっぴ）を着て、頭に手ぬぐいを巻いた4、5歳くらいのわたしが、澄まし顔で写っていた。

きっと、夏祭りだろう。鼻筋には、白粉（おしろい）の線がスーッと引かれている。おおお、まさにMちゃんおすすめのハイライトではないか。だがわたしの胸には、何やら苦い思い出がふわふわと浮上してきた。

それは、床屋さんのおばちゃんの指で鼻を撫ぜられた記憶だった。大きな鏡に映る、刈り上げ終わった顔のまん中には「ここが鼻よ！」というように。くっきり白い線が引かれていた。

次からは鼻白粉を遠慮したいと、親に頼んで訴えた覚えがある。だがおばちゃんは笑って取り合わない。そのうち床屋さんで聞くと泣いて嫌がるようになり、いつしか伸ばし放題の三つ編みに。

おそらくわたしは近所の悪童たちに、床屋さんに行ったと知られたくなかったのだ。負けず嫌いの5歳児にとって、見た目を気にするメメしい行為に思えたのかも。子どもなりにカッコつけたかったんだろう。

今なら、ハレの日ならではあの白い線は、日本古来の神様との交信なんだと理解できるが、子どもにそんな考えは通用しない。

もしあの頃のじぶんに会えたら？

「あなたの鼻が白かろうと黒かろうと、だ〜れも気にしてないよ」と、伝えたい。

=2023年6月23日掲載=

